
それでも君を愛してた

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも君を愛してた

【Nコード】

N6119K

【作者名】

るうね

【あらすじ】

僕は走った。全ての記憶がなくなる前に。

電車から降りると、走った。

改札を抜け、クラクションを鳴らされるのにも構わず、駅前のロータリーを走り抜ける。目指す新興住宅地が、遠くに見えた。

息が切れる。足が重い。それでも走り続けた。時間がない。

病気だった。記憶を失う病気。記憶喪失のように一瞬で全てが失われるのではなく、段階的に記憶が摩滅していく。すでに、自分の名前すら覚えていない。残っているのは、彼女を愛しているというこの気持ちだけ。彼女に会いたい。その一心で、病院を抜け出してきた。彼女がどこに住んでいるかは、まだかろうじて覚えていた。ただ、ひたすら、そこを目指して走る。彼女への愛が消える前に。

住宅地に入った。彼女の家は、もうすぐ。あの角を曲がったところ――角を曲がりかけたところで、足を止めた。白壁の真新しい二階建ての家。家自体は比較的小さいが、その分、庭が広い。その庭に、彼女が立っていた。隣に、見知らぬ男性。彼女に何か語りかけている。二人とも、幸せそうに微笑んでいた。

不意に、摩滅したはずの記憶が蘇った。彼女は結婚したのだ。僕と別れた後に。忘れていた。

もう一度、夫と話す彼女の幸せそうな表情を見つめる。僕の恋人だった頃、よく見せてくれた表情、そして僕が病気になってから別れるまでの数年間に、徐々に見られなくなった表情だ。病気を発症してから、僕は彼女に冷たく接するようになった。暴力こそ振るわなかったが、ひどい言葉を投げつけたことも、一度や二度ではない。徐々に、彼女の気持ちに離れていくのを感じながら、それでも僕は態度を変えなかった。病気に対する不安や恐怖のはけ口にしたという側面も、もちろんあった。ただ、それ以上に、彼女が僕に愛想を尽かしてほしい、という思いがあった。僕と別れ、僕のことを忘れて、新しい幸福を見つけてほしい、と。彼女は優しすぎた。普通に

別れ話を持ち出したとしても、首を縦には振らなかったに違いない。そんな彼女が良心の呵責を感じないように、僕と別れるように仕向ける。結局、僕の計画は成功し、彼女は僕から離れていった。

危なかった。いま、ここで彼女の前に姿を見せれば、全てが台無しである。病気で忘れていたとはいえ、かつての自分の決意を踏みにじるところだった。

僕は、彼女と彼女の幸せに静かに背を向け、駅に向かって歩き出す。途中で、小学校低学年ぐらいの女の子とすれ違った。背後で、

「パパー、ママー」という声が聞こえる。僕は足を速めた。

駅まで来て、ハッと我に返り、辺りを見回す。

ここは、どこだろう？

どうして、僕はこんなところにいるんだろう？

なぜ、涙を流しているんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6119k/>

それでも君を愛してた

2010年10月10日02時58分発行